

松山幸生先生講述

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全32回--27

2023年10月

写者

小原靖夫

第27回

すべての人との平和、聖なる生活の追求

ヘブライ人への手紙第12章⑭節から⑲節

キリスト者にふさわしい生活の勧告

- ⑭すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。聖なる生活を抜きにしてだれも主を見ることはできません。
- ⑮神の恵みから除かれることのないように、また、苦い根が現れてあなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚れることのないように、気をつけなさい。
- ⑯また、だれであれ、ただ一杯の食物のために長子の権利を譲り渡したエサウのように、みだらな者や俗悪な者とならないよう気をつけるべきです。
- ⑰あなたがたも知っているとおりに、エサウは後になって祝福を受け継ぎたいと願ったが、拒絶されたからです。涙を流して求めたけれども、事態を変えてもらうことができなかったのです。
- ⑱⑲あなたがたは手で触れることができるものや、燃える火、黒雲、暗闇、暴風、ラッパの音、更に、聞いた人々がこれ以上語ってもらいたくないと願ったような言葉の声に、近づいたのではありません。
- ⑳彼らは、「たとえ獣でも、山に触れれば、石を投げつけて殺さなければならない」という命令に耐えられなかったのです。
- ㉑また、その様子があまりにも恐ろしいものだったので、モーセすら、「わたしはおびえ、震えている」と言ったほどです。
- ㉒しかし、あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、
- ㉓天に登録されている長子たちの集会、すべての人の審判者である神、完全なものとされた正しい人たちの霊、
- ㉔新しい契約の仲介者イエス、そして、アベルの血よりも立派に語る注がれた血です。
- ㉕あなたがたは、語っている方を拒むことのないように気をつけなさい。もし、地上で神の御旨を告げる人を拒む者たちが、罰を逃れられなかったとするなら、天から御旨を告げる方に背を向けるわたしたちは、なおさらそうではありませんか。

②⑥あのときは、その御声が地を揺り動かしましたが、今は次のように約束しておられます。

「わたしはもう一度、地だけではなく天をも揺り動かそう。」

②⑦この「もう一度」は、揺り動かされないものが存続するために、揺り動かされるものが、造られたものとして取り除かれることを示しています。

②⑧このように、わたしたちは揺り動かされることのない御国を受けているのですから、感謝しよう。感謝の念をもって、恐れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていこう。

②⑨実に、わたしたちの神は、焼き尽くす火です。

今日ご一緒に学んでゆきます箇所には、「キリスト者にふさわしい生活の勧告」という小見出しがついています。この小見出しの内容がどこでどうなってこういうことが言えるのかなと、お感じになった方もあるかもしれません。

第⑭節前半、

すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。

私は、この⑭節の前半の言葉が「キリスト者にふさわしい生活の勧告」ではないかと思うのです。これに応えてゆくために、神がどういうものを御用意くださり、私たちはどう歩んでいったらよいのか、この箇所ではそれらが当然問題になっていくと思います。

先ず「すべての人との平和」という言葉で書かれているこの時代は、ヘブライの人々にとって、ローマ帝国による新たな迫害が引き起こされようとする寸前であって、そういう状況が彼らの身のまわりにひしひしと迫っていた時期だったのです。

特に、信仰そのものが否定されようとしている、あるいは神を信じて生きることがこの時代の中では受入れられない状況が起こりつつある、そういう信仰的危機の状況下で「あなたがたは人との平和を求めなさい」という呼びかけは、彼らにとっては、全くとんでもない勧めだと捉えられる言葉であったに相違ありません。

多くのそしりや迫害や困難が襲う時、人々はそれに耐えてゆこうと志します。耐えることは我慢することですから、それが酷くなればなる程、攻撃する者に恨みを持ち、怒りをもちます。そして、できることなら彼らがいなくなるように願います。

「しかし、それは平和ではない」と、ここで書かれています。

「平和を求め合う、すべての人」とは、「そういう、迫害を加えたり疎外したり中傷したり、あるいは抹殺しようとするような人々をも含むこと」を意味しているのです。つまり、「平和」という言葉が使えないような状況下で、尚も「あなたがたは平和に過ぎなさい」と勧めているのです。

今、1998年という時代、神の大きな忍耐が2000年間続かんとしている時代の日本に生きる私たちは、神を信じて歩むことが困難な、あるいは、多くの人々が神によって創られたことを喜んで生きることができないような、この時代の中に立たされています。

言い換えると、小さい者、弱い者に心を向けるよりも、大きな力の中に皆を巻き込み、大きな力で皆を左右できる人間が、優位にその生活を進めてゆけるような世の中を築くうねりが起こって来ているということです。

だが「それは、平和に過ごしていない証拠だ」と、そのように感じなければならない世の中に生きていることだから、尚更「平和でありなさい」との声が心に響いて来るのです。

この平和という言葉は「穏やかで優しく、すべてのことに従順でありなさい」と言っていることではない。ここに使われている「平和=シャローム」というのは、「神から与えられる私たちの生きざま、そのもの」なのです。

迫害が酷く、混乱が起こり、世の中が乱れ、さまざまな不安が立ち込めるその中で、そうなればなるほど、「より一所懸命に神との関わりを確立してゆきなさい、それが恨みに生きるのではなく、救いのために、赦しのために、愛のために生きることに繋がるからです、それが、平和なのです」と言っています。

今月の31日は「ペンテコステ記念日」で、この相模原市内にある幾つかの教会が集まって「宣教のシンポジウム」を開こうとしています。「21世紀に繋げる宣教活動を、地元相模原の人々の救いのためにどうやったらいいだろうか」と考えて行うわけですが、その中で、やはり考えるべき問題は、同じことです。

どうやったら、私たちの前に立ちはだかっている、古いものの考え方（それは、自己確立によって初めて他者を従わせることができ、大きな権力を持つことが即ち自分が優れた者となることだという考え方）に立っている人々に対して、「そうした考え方や生き方から脱却して、主に仕えることこそが、大きな恵みなのです。」と語っていけるだろうか？
そのような問題と真っ向から向き合いながら、私たちは宣教という問題を考えているのです。そして、キリスト御自身が示してくださった生き方を共に生きる時、間違いのないという確かさが自分たちの心の中に広がって来ます。

この箇所を読みながら、「ガリラヤ湖上でイエスと一緒に舟出をした弟子たちの姿」を思い出します。主が乗っているから大丈夫だということで舟出するのですが、湖の真ん中位まで来ると突然すごい風が吹いてきて、舟は沈むかもしれないと思う程、木の葉のように揺り動かされた。その時、イエスの弟子たちの心には平和はなかった。恐ろしさの余りイエスを揺り起こして、『私たちが死んでもかまわないのですか』と尋ねた。これが、平和を失った姿なのです。¹⁹⁷

日本の教会も、その意味では同じような過ちを50数年前に冒して来ました。本当に自分たちキリスト者が生き延びるためには、権力に従う他はないと考えた。命じられるまま、神を礼拝する前に「皇居遙拝」というのをやった。まず、天皇は優れた存在であると認めて、それでやっと教会の礼拝が守れるという現実の中で、教会が本当の神を見失ってしまったのです。そのことによって「十字架の上で血を流してくださった御方が共にいてくださる（インマヌエル）という信仰が潰えてしまった」そういう事態が起こったわけです。

「平和に過ごすこと」とは、その意味では「イエスの十字架を日々経験しながら生きること」でなければなりません。それが平和なのです。これは、ちょっとやそつとで心の中にきちんと収め、納得できる言葉ではないのです。日々十字架を担って生きる、日々キリストの十字架を思いながら生きる、日々十字架に焦点を合わせて歩むことは、「闘いであって、平和ではない」と考える方も多いかもかもしれません。

でも、今日のこの箇所をもう一度、読んでみますと、「すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい」と書いてあるのです。

「聖なる生活」とは、聞き慣れぬ言葉と思われるかもしれませんが、「世の中がやっていない神中心の生活、信仰以前とは違った生活」ということに尽きることで、「聖」とは、素晴らしいとか、美しいという意味ではなく、区別されたとか、一般のものとは一緒でない、という意味ですから、そういう生き方をしなさいと奨励されているのです。¹⁹⁶

「他の者と同じでない生き方、即ち、名誉、富、力を追い求めたりする生き方でもなく、自分自身が人々から認められる生き方でもなく、自分が人からどう扱われようと問題にしないで、あなたの前にいる弱い人を顧み、あなたが神と結びつくことのみによって与えられる祝福を彼らにも与え続けてゆく、そういう生き方」が求められているのです。ですから、冒頭の「すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい」は、もの凄く貴重な言葉なのです。

教会の礼拝者に、「どうして教会に来るようになりましたか」と聞くと、大体百人中九十九人までは「私は罪深い者ですから、清められて素晴らしい人間、素晴らしい人格をもった人間になりたいくて、来たのです」と仰います。

ところが、ここに書いてある内容はそうではないのですね。「皆がそう考えるんだったら、あなたがたは、そうは考えないで、違う道（聖なる生活）を生きてゆきなさい」と。でも、私たちがいつも物を考える時の下敷きにするのは、自分たちの周りにある世の中のものの考え方、ものの見方、あるいは自分を守ってゆくための知恵で、どうしても、そういうものを求めてしまうのです。

今、「いじめの問題」についての話し合いが盛んに行われていますが、世間では「皆と違うことやるから、いじめられるんだ」と言います。そうになると、教会の民は迫害に遭うた

めに生きるような者になるのですか？昔の自分と違うことやりますから、いじめられ、無視され、捨てられるために生きているのですか？それを馬鹿みたいと思いますか？

「神を否定して生きることは、神を信じる者を馬鹿にしたり疎外したり、あるいは無視したりして、自分たちの利害、損得をまっしぐらに追求する生き方です。それを、見える形でなく、見えない形で心の中に正当化させてしまう力、それが『迫害』なんだろう。」とも思います。

「目に見える迫害」だったら、私たちは何とか対処し耐えられるでしょう、乗り越えられもするでしょう。が、「自分の心の底を侵食してくる迫害」には、気がつくことがなかなかできない。戦前の教会もそういうものに、いつの間にか毒されていた。だからあえてこの著者は、「すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい」とここで勧めているわけです。

「なぜ、それが必要なのか」と言えば、「クリスチャンの究極の目的は、主と共に生きること、主の御招きにあずかること、主の御恵みの宴に列席させて頂くこと」であるはずで
す。この世の祝宴に列席することでもなければ、この世の名誉に与ることでもなく、「朽ちない命の恵みに与ること」、それが信仰の正しい方向性であるのですから、ここに書かれている言葉に十分に着目をしながら、毎日毎日を生きてゆかなければならないと思います。198

第⑭節後半、

聖なる生活を抜きにして、誰も主を見ることはできません。

主と共にありたいと願えば、「世間と同じことやっていたら、駄目です」と書いてあります。これもかなり抵抗ある言葉かなと思いますが、「仲良しごっこ」をやっていたんじゃ駄目です、あるいは、自分たちが楽な道を追求したんじゃ駄目です、ということです。そして、神を見上げ続けることによって、私たちは初めて聖なる者として成長するわけですから、神を見上げることができなければ、言い換えれば、模範をしっかりと見つめられなかったら、何をしたいのか分からなくなって戸惑い、心に平安を失ってしまいます。そういう意味で、「聖なる生活をしなかったら、主を見ることはできない」と書いてあるのです。

でも、これを律法的に考えたり、箇条書き的に捉えれば、ひよっとしたら「聖なる生活をやってみよう」と考える人があるかもしれない。「朝は〇時に起きて先ず神に祈る、聖書の御言は毎日きちんと読む、と箇条書きにして毎日きちんと出来たなら、あなたは聖なる生活をしていることになりますよ。丁度、修道士や修道尼たちのように出来たなら、それが聖なる生活なのだ」と言われれば、納得して「ああ、それならやってみようか」という人が出てくるやもしれない。200

ところが「皆がやっていないことを為して、生きて行きなさい」と言われると、どうしたらいいのか分からなくなってしまう。ですが、イエスの御生涯を丁寧に辿ってみますと、「イエスは誰もがやらなかったことだけを為さっていった御生涯だった」と分かります。榮譽を求めない、地位を求めない、富を求めない、自分が皆から担がれることを望まない、力ある者として皆の前に君臨し皆から服従されることを求めない御生涯だった。当時の社会からは見捨てられた者の友となられて、見捨てられた側に身を置かれ、人々から蔑まれている者の友となられて、御自身も蔑まれる者となられました。

一方、多くの日本人の精神的風土の背景をなしている「仏教的発想」は、自分が背負っている一切の労苦から解放されるため、その重い苦痛や苦悩から解放されるために、「私は何をしたらば、よいのか」という命題の回答を求め、「修行」してゆきます。200

だが「聖書」はそうではない。そういう問題で悩み苦しんでいる人々に対して、「私には何ができるか」を考えてゆく、それは、私自身のためではないのです。

平安を奪われ、喜びを奪われ、希望を奪われた人々に、平安を、喜びを、希望を回復させるためには、「私に何ができるだろうか」と考えて生きることが、実は、皆と違った生き方である『聖なる生活』なのです。

唯ひたすら願い求めてゆく生き方が「イエスに倣うこと」であれば、清らかな素晴らしい生活となるでしょう。しかし、イエスを抜きにして「清らかな素晴らしい生活をしよう」それだけをモチベーションに行えば、それはもう「律法的」であり、そのこと自体が自分を縛り不自由にさせ、果ては欲望の虜ともなりえます。つまり、そうした生活を達成して、他の人よりも立派に生きること、私たちは直ぐ関心の矛先を移してしまいがちなのです。

「マルチン・ルター」でさえ、一介の修道士であったとき、キリストの痛みを感得し、キリストの恵み、苦しみにも与りたいと願って、厳しい修行をしました。そのとき、彼が感じた達成感は何だったかという、「私は他の人よりも良くやった！」だったのです。

イエスに近づくことは「他の人より良くやった」ではなく、「自分のやっていることは些細なことだが、このことによってあの人が救われ、この人が救われるのなら、主に深く感謝しよう」という生き方であるはずです。けれども、それが見えて来なかった。幾ら頑張っても最終的には「この俺様は、良くやった！」という自己評価でしかなかった。201

その時に「ローマの信徒への手紙」の中の御言の槍が、ルターの心を鋭く貫いたのです。そして彼は「人間は行ないによっては救われない、自分の思いによっては救いはない、イエス・キリストの福音によってしか、救いはないのだ。」という救いの奥義に達することができたのです。

「皆がやっていることを為し、しかも皆がやっているよりも立派にやるのが大切だと考えている内は、本当に神を見ることはできない」これはすごい言葉であると思います。

「立派な信仰生活を送っている」なんて皆から言われたいと思いますか？「あの人の信仰は立派だね」と言われたら嬉しいと思いますよ。でもこの箇所を読む限り、「そう言われて浮かれていたら、おしまいだよ、神を見ることはできないよ、自分しか見えていないよ」となるのです。

皆と違った生き方をする、この「聖；カードーシュ、区別される」という言葉は、そのような厳しい意味をもっている言葉です。ですから、「聖なる生活というもの、もっと平たく言えば、イエスに倣って生きる生活、イエスが歩まれた道を共に歩むと言ってもいいのかもしれませんが、それができなかつたら、私たちは神を見ることはできない」とここでは述べているのです。

第⑮節

神の恵みから除かれることのないように、また、苦い根が現れてあなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚れることのないように、気をつけなさい。

「神の恵みから除外される」とは、神が見えないこと、神の祝宴に与れないことです。そうにならないために「苦い根」、即ち「神の恵みを恵みとして受け止められない高ぶり、自分の益のためだけに何かしようとする思い、神に従うのはつまらないと感じる心」が起こってこないように、「そう思うことによって、多くの人が汚されないように気をつけなさい」、これもすごい言葉です。

私の行動は、多くの人々のために方向性を与えるのです。私が、皆はやれないような生き方をして、イエスがなさったように生きていけば、皆が救われますが、私が昔の自分のように生きていたら、皆も汚れて呪われます。隣人のため、国民のため、世界の人々のためと考えるなら、その人たちが救われるように願い求めるなら、「先ずあなたが」イエスのように生きることです、イエスの模範に従うことです。

自分の行っている一挙手一投足が、ひいては、この世の人の救いと結びついている、すごい大きな責任を担わしめられています。だから、私たちが迷うと、世の中の人々も迷うのです。私たちがつまずくと、世の中の人々もつまずくのです。

「いつでもどんなところに立たされても、どんな状況の中に身を置かされても、そこにおられるイエスにしっかり目を据え、その御方がなさるように一緒に行動していく、その延長上に、すべての人の救いが確立してゆく。」裏返して言えば、そういうことなのです。

この言葉をそのように読んでゆくと、とても大事なことが書かれていることにお気づきになると思います。が、それと同時に「私たちには、そんな大それた力はなく、自分にはとてもできないと考えてしまう、無理だなと思ってしまう」という一面も否定することはできないでしょう。

第⑩節、

また、だれであれ、ただ一杯の食物のために長子の権利を譲りわたしたエサウのように、みだらな者や俗悪な者とならないよう気をつけるべきです。

「淫らな者、俗悪な者」とは、神が与えてくださる祝福よりも「今の自分の満足を先行させてしまう生き方をする者」だと考えていいと思います。

神がこの先にくださる恵みよりも、今、私が満足を感じることの方が大切だと考える生き方、これは私たちの中にはよくあります。私が本当に満足していなかったら、どうして他の人を喜ばせることができるだろうかと考え、だから、いつも自分が満足していることが優先だという人がいます。が、それなら「何をもって満足しているのか」が問われます。

たらふく食べて満足している、それも満足の方法です。豊かな富をもって満足している、それもひとつかもしれません。が、「自分がどんなに貧しくあろうとも、辛い立場に置かれようとも、多くの人たちから無視されようとも、人々から顧みられない状況に置かれていようとも、そこで、主に在る満足を感じている。」そういう高貴な満足もあるのです。

204

ある時その話をしたら、その相手が言いました。

「そんなことしていたら、キリスト教では人間は進歩しなくなる、社会は良くならない。今置かれたところで満足してしまったら、世の中進歩しないよ。」と。その人にとっては、やはり問題は「世の中」なんですね。

「聖書」は、それに対してどう答えているか。

イエスに目を注いで生きている人間は、むしろ、終わりの時をしっかりと見据えて、生きているはずです。だとすれば、その満足は「神の国の民とされている満足、神の国の宴に列席できる満足」なのです。少なくとも今現在の満足だけではないのです。終わりの日、主が裁かれる時、その裁きにおいて救われ、永遠の命に与る者とされるという『大満足』なのです。

どうも私たちはそういう意味では、「神が終わりの時を与えていらっしゃることに対する日々の認識」がすごく欠落している。限られた世代の中で、限られた時の中で、満足していこうとします。今、生きることに満足があるならば、それでよいのだと考える。「終わりの日の裁きなどは「あれは単に言い伝え、脅しであって、今、満足していなかったら何にもならないのだ」と。もっとそれを突っ込んで言えば、「私が神によって創られたことに対する信仰が、そこでは非常に希薄になって来ている」と言えましょう。

救ってくださった御方が喜ばれない生き方をするならば、その御方は満足なさらない。お創りになられた御方が満足なさらない状況であれば、私たちの満足は、あり得ない。205

「神が満足してくださるような歩みを今なしているだろうかと、いつも真剣に追い求めて生きてゆくことが『聖なる生活』だ。」とも言えると思います。

さて、エサウのように「今の満足のために祝福を投げ捨ててはいけません」とこの節に書いてありました。その続きです。

第⑰節

あなた方も知っているとおり、エサウは後になって祝福を受け継ぎたいと願ったが、拒絶されたからです。涙を流して求めたけれども、事態を変えてもらうことができなかったのです。

これは、創世記の物語だけを語っているわけではなく、同じように終わりの日に、何を求め何を考えたとしても、もし今の満足が神の祝福よりも大切なものであると考えるなら、もはや祝福は去ってしまうと言うのです。後になってどんなに悔い改めても遅いのです。

ある友人がかつて聖書の勉強を一緒にしていた時に、「終わりの時、神は私たちを救ってくださる、どんな罪をも赦してくださる。だとしたらば、今のうちから一生懸命になって神の言葉に従おうなんて思うよりも、今のうちにやりたいことをやり放題にやって、いよいよ最期の時に、神に救って頂いた方が楽じゃないか。」と言ったのです。

でも、ここを読んでゆくと、そうは書いてないのです。「今やりたい放題やっている人間が、後になって、救ってくださいと言っても駄目ですよ。」と書いてあります。²⁰⁶だから、私は、今の時代に宣教をするのです。皆が聞いてくれなくても、耳を傾けなくても、そんなことはどうでもいいじゃないかと言われても、「そうじゃないんだ」と言って、神が命じてくださった福音を伝える業に、勤しんでいるのです。

信仰をもって生きることは、「キリストを模範として生きることであり、皆が望まなくても、神が望まれる救いを皆に伝えることのために、自分を差し出して生きてゆく、神の御前に献げて生きてゆく、そういう生き方でなければならない。」と書いてあるのです。勿論、これは、キリストを信じている人々に向かって、書いていることなのですが。

そして、この世の人に向かっては、聖書はそんな難しいことは言わないのです、「信じれば救われますよ、あなたがどんな状態でも救われますよ」と言うのです。だからと言って、一旦信じた人間が「今は信仰を離れていても、また信じればいいんだから」と思うかもしれないけれど、そういうわけにはいきませんよ、とも書いてあるのです。

第⑱節以降、

あなたがたに与えられている恵み、祝福とは何なんだろうか」聖なる生活をするものに約束されている祝福とは何だろうか」を「二つの山」のお話を通して語っています。

一方は「シナイ山」、モーセが神から律法を頂いた山です。その山は手で触れることができ、目で見ることができました。しかしその山は、汚れた私たちが近づくことを拒絶しました。「触れたら死ぬ」とそう言われてきました。これは、申命記の19章に書かれています。

す。シナイ山で十戒を頂いた時に起こった出来事です。「獣であれ、何であれその山に近づく者は皆死んでしまう」そういう厳しさをもった山でした。

ところが、②節、同じように今私たちは、神の祝福が一杯満たされている「シオンの山」に招かれています。シナイ山とシオンの山との対比をここで成すわけです。シナイ山は人々を拒絶したけれども、シオンの山は人々を拒絶しない。誰であれ神の招きに応えて救いを頂きたいと願う者は、その山に登ることがゆるされている。

それは、既に大きな神の威光と威厳とがイエス・キリストの十字架と復活という出来事によって明確に示されているから、人が山に触れることによって滅ぼされたり、神は素晴らしいのだ、御力があるのだということを誇示されたりする必要がなくなったのです。

「古い律法と新しい律法」「古い救いの民と新しい救いの民」、そういう対比がここでは成されていくわけですが、その対比の中で、やはりしっかりと見据えておかなければならないことは、「旧約にはなかった新しい神の契約により、神が終わりの日のために与えてくださった、私たちへの憐れみとしての『救い』がこの世に臨んだこと。即ち、御子キリストが贖いとなってくださったということ」です。208

旧約時代にはこの大きな贖いの出来事を知らなかったから、皆は神のところにゆくために遠回りしたのです。正に荒野の40年のように、神の所に行けることは知っていても、回り道をして40年もかからなければ神が与えてくださった土地を見られなかった。

ところがイエスは、もっと単刀直入に「信ずる者は皆救われる」と言われた。もう迷い歩むことはなく、信じたなら、神はあなたがたと共にシオンの山に在る。だから、出会いの手立てを考える必要がない、神がくださった恵みがここにあると信じ、その恵みに与ればいいわけです。神が与えてくださった模範に従って一步一步あゆんでゆけばよい。これが、さっき言われていた「模範として生きること、聖なる者となること」です。

「私たちは、神の恵みの内に捕らえられていて自由（ここでは、自分の中に^{ことわり}由があること）である、という確信が一人一人の中に豊かに注がれていないならば、神の前に生きているとは言えないのだ。どうしようと戸惑っていたり、立ち止まってみたりするような人生は救われた者の人生ではありませんよ。」ということにもなる。そういう神との生ける関係が、この⑱節から後の部分では大変力強く語られているのです。

第⑱、⑲節、

あなたがたは手で触れることができるものや、燃える火、黒雲、暴風、ラッパの音、更に、聞いた人々がこれ以上語ってもらいたくないと願ったような言葉の声に、近づいたのではありません。

ここに書かれているのはすべて神の権威を表し、御力を表すものとして申命記の中で登場して来ます。神の御声を聞くと死ぬと言われてきたのですから、「もう聞きたくない」と皆そう思ってしまったが、私たちは、そのような神の御声に近づいたのではないのです。

第⑳、㉑節、

彼らは、「たとえ獣でも、山に触れば、石を投げつけて殺さなければならない」という命令に耐えられなかったのです。また、その様子があまりにも恐ろしいものだったので、モーセすら、「わたしはおびえ、震えている」と言ったほどです。

これは旧約時代の「シナイの山」ですね。それに対して「シオンの山」については次に書いてあります。

第㉒節～㉔節、

しかし、あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、天に登録されている長子たちの集会、すべての人の審判者である神、完全なものとされた正しい人たちの霊、新しい契約の仲介者イエス、そして、アベルの血よりも立派に語る注がれた血です。

これは私たちが良く味わうことが必要とされている黙示だろうと思います。210

つまり、私たちが神の恵みによって導かれ、神の憐れみによって立たしめられているこの救いの場は、「生ける神の都、天のエルサレム」と書いてあります。あるいは「無数の天使たちの祝いの集まり」で、「この祝いの集まり」という言葉には、エクレスシアという言葉が使われています。このエクレスシアという言葉は少し別な意味では「集会」です。キリストによって召され、招かれた集会、集まりという意味です。

そういう者としてそこに召され、そこに位置づけられているすべての人の「審判者である神」、私たちが捉えて甲乙をお付けになるのは神です。他の誰でもなければ、あなた自身でもありません。このところをしっかりと押さえておかなければならないのです。

この間、ある集まりで「最近の少年たちの犯罪をどうやったら防げるんだろうか、どうやったら、あそこから立ち直らせられるんだろうか」という話し合いをしたのです。家庭がこうであればいいとか、教員がこうであればいいとか、あるいは文部省がもっとカリキュラムをこうすればいいとか・・・幾らそんなことを語ったって、更生は難題なのです。

私はそこで「本当に彼らが愛されていること、かけがえのない価値をもっていること、そして、あなたが本当に大事にされて、あなたのために一生懸命になっている御方がおられることを語り伝え、心に覚えさせる以外に、今問題を解決する道はないんですよ、いじめられようと、人々から馬鹿にされようと、そんなことがあなたの価値には何の関係もないんだよと本当に教え込まなければならない。確信をもって教えなければならない。それができない時代だから今、子どもたちはすさんであんな状態になっているのではないでしょうか」と言ったのです。

更に「彼らにそのことを語ってないからだよ、それが彼らの心に伝わってないからだよ、そのことを語れるのは教会しかないんだ、私たちにしかできないんだよ、だから教会は悔い改めて実行しなければならないんだよ」と。本気になって私はそう考えているのです。

そういう意味で、聖書の御言を私のためだけの言葉にすり替えてしまってはいけないと思います。聖書の御言は、神がお創りになったすべての人々への言葉なのです。そして、終わりの日にすべての人が救われるために必要なことを、聖書は告げているのです。

そこでは、審判者である御方があなたを神の前に立たせて、「よろしい」と宣言されようとしていらっしやる。イエスは十字架の上で「あなたがたの一切の罪責は拭われた。もうあなたがたは天国の民なんだよ」と宣言してくださっています。にも拘らず、多くの方が「どうやったら、天国に行かれるのですか？」とお聞きになるのです。

あなたが「何かをやって」天国に入れるくらいだったら、イエスは十字架になんかにお架かりになられなかった。あなたが何をやったって、どんなに真面目に考えたって、どんなに清い生活しようと努力したって、そんなことでは、絶対天国には入れないのです。私が本当にイエスが贖ってくださったと信じ、神がその私を愛してくださり、私と共に生きてくださり、この私を既に神の国の住人として登録してくださっていることを本気になって信じない限り、「神の国に生きる喜びを生きることはできない」、多くの人を救うという「救いの御業に参加することはとてもできない」ということを、ここで述べているのです。

私たちは、ここに書かれている光景は、それはそれは素晴らしいと感じます。幾重にも書いてありますが、「あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、天に登録されている長子たちの集会、すべての人の審判者である神、完全なものとされた正しい人たちの霊、新しい契約の仲介者イエス、そしてアベルの血よりも立派に語る注がれた血です」と。

イエスご自身が、聖めるために注いでくださったあの貴い十字架の血潮が、あなたをも既に聖めて、神の国の住人にしてくださっています。そして、あなたが神と共に生きる者、神の国の宴に列席するように、既に座席札も用意されているのです。213

神に祝宴に招かれているということを本当に覚えなければいけないですね。例えば、私たちは結婚式に招かれ、出席しますと返事すると出席札が用意されます。どこに座るのかなと思ひながらその日のために自分を相応しく調べていこうと準備して、結婚式に列席したり、披露宴に参加したりしますが、神には「参加します」なんてお返事をしなくても「あなたのために天国の宴の席札を用意してあるのですよ」と言ってくださっています。

でもどうもそれがピンと来ない、なぜかというと「天国の宴には何月何日と書いてない」からなのです。何月何日が待てなくなった人間は自分たちで日にちを決めようとしま

す。(エホバの証人のように1914年にその日が来ると宣言したために困っています。) だが神は、神の時をきちんと用意していらっしゃる。それを信じ、まどろむことなく目覚めて主を待つ者だけがその席に着けると、聖書には書いてあるのです。これも良く考えてみると、皆がいいというやり方ではなく、違った生き方なのです。「いつだかわからない時を本気で待つなんて、この世の中ではできないことです。ところがそれをしなさいと仰るわけですから、聖なる生活です。世間とは違う生き方です。」²¹⁴

聖書は時折、面白い突飛なことを告げます。私たちは、その突飛なことを突飛なこととしては聞きたくない。聖書は理路整然としていて素晴らしいものだ、合理性に適ったものという前提で読もうとしますから、聖書の告げることが分からなくなるのです。

でも、私たちの合理性なんて元々しっちゃかめっちゃかなのですから、私たちの合理性に合ったようにと思って読むと、聖書はしっちゃかめっちゃかになるんです。

聖書には、どうもおかしいというところが一杯あります。でも「どうもおかしいと思っている私たちの方がおかしいんだ」ということに気がつかない限り、本当に聖なる生活なんてできません。「聖なる生活」はその意味ではおかしい生活なのです。

皆は、変な生活をしないで立派な生活をしようとしていますから、また、できる自信がありになる方が多いですから、どうしてか「聖なる生活」ができないのです。私なんか神にお任せする以外にないと思っているので、もうしっちゃかめっちゃかな「聖なる生活」を平気で送っているわけですけども。

(しっちゃかめっちゃかという言葉は松山幸生先生は、親しい間柄ではユーモアを交えて使っておられました。この文章も先生に「しっちゃかめっちゃかな『聖なる生活』ってどんな生活ですか？」と質問したくなります。そんな親密な集まりであったことが、ここから読み取れます。書写註)

「神がこの私をかけがいのないものとして愛してくださる」この信仰が私たちの中に確立していれば、終わりの日に備えてくださっている大きな喜びのために、今を真剣に生きられるのではないかと思います。何が起こっても、もう天国での席が予約されているのだ、既にあそこで宴が用意されているのだと確信できれば、今、多少混乱があろうと困難があろうと、それを乗り越えゆく力が十分に与えられていくのではないかと思います。

主が共にいてくださるとは、正にガリラヤ湖上の木の葉のように揺れる舟の中でも平安はあるという、あのイエスの御言と一致するものだと思います。その平安を生きることが「聖なる生活をする」ということなのです。そんな風に捉えて頂くと、イエスの血潮を本当に崇めながら生きてゆけるのではないかと思います。

第25節、

あなたがたは、語っている方を拒むことのないように気をつけなさい。

もし、地上で神の御旨を告げる人たちを拒む者たちが、罰を逃れられなかったとするなら天から御旨を告げる方に背を向けるわたしたちは、なおさらそうではありませんか。

彼らの一番聞きたくないところが出てまいりましたね。

天から神の恵みを伝えようとしておいでくださったイエスに背を向けた人々が沢山いました。イエスが復活なさって神の大きな御力を表してくださったのに、もう駄目だと考えて「故郷のエマオに向かってトボトボ歩いていた弟子たち」もいました。もうそこには滅びしか用意されてはいませんでした。イエスはその魂を惜しんでくださった。だから近づいて何とか彼らが滅びに向かって歩んでいる道から、命に向かって歩む道に戻るように声をおかけになり、励ましを与え、御言をもう一度彼らに説き明かしてくださった。

神は私たちの命を惜しんでくださっている。私の命だけでなく、あんな奴いなくなってもいいと考えられているような人の命さえも惜しんでくださっている。そのことを本当に覚えたら、そんな御方に背を向けて歩むということは到底できなくなるはずですよ。216

第②⑥、②⑦節

あのときは、その御声が地を揺り動かしましたが、今は次のように約束しておられます。

「わたしはもう一度、地だけではなく天をも揺り動かそう」。

この「もう一度」は、揺り動かされないものが存続するために、揺り動かされるものが、創られたものとして神に取り除かれることを示しています。

あやふやな、いい加減な、どっちつかずな生き方をしている人間が、そのことのゆえに神の大きな祝福の座から排除されてしまう結果を招いてしまうリスクを、神はそのように警告しておられるのです。主はお試しになる、だから主の祈りで、イエスは「私たちに試みに遭わせず、悪から救い出してください」と祈りなさいと教えてくださったのです。

主が試される時、資格を欠いた者とならないために神の恵みに留まり続けられるように「主よ、憐れんでください」と主の祈りで教えてくださった。「もう洗礼受けたのだから大丈夫だ、礼拝に行っているから大丈夫だ、聖書のこと良く知っているから大丈夫だ」とは、聖書のどこにも書いていないのです。

もう一度、主は地の基から天をも揺り動かされて、その揺り動かされる御力の中でも恐れることなく、主の御業としてそれを受入れ、喜んでそれに耐えうる者を、主は示そうと立ち上がっていらっしゃるんだと書かれています。

私たちは「神と一緒にいてくださるのにどうしてうまくいかないんだろうとか、何でこうなんだろう」とかよく言います。神と一緒にいてくださるのにどうしてうまくいかないんだろうということは、一緒におられることを疑っている証拠です。疑っているからそうになっているんですよ、実は。

「何で神さまがいるのにこうなんだろう」に、私は「あなたがそう思っているからですよ」と言います。一番確かなことです。神は最善のものを用意して下さり、きちんと与

えてくださっているのにそれが見えない、分からない。いや、私たちが知っている知恵や知識や認識とはすごくかけ離れていることなので、どうも納得できないのです。

大事なのは、自分が納得することではないのです。自分が神の前にすべてを捨てて信じる
ことなのです。神が憐れみ納得してくださることなのです。どうもいつでも私たちは基準
を自分におきます。だから、もっとまじな生活をしようとか、昔から立派だと言われてい
るような人物になろうとか、クリスチャンになったのだから、それに相応しい人間になら
なければとか・・・。

でも、私たちはそんな格好をつけることを一所懸命考えるのではなく、イエスが歩まれた道を、迷いながら、たどたどしく、時にはつまづきながら、転びながら、（それでもいい、イエスは待っていてくださるのですから）歩いてゆけばよい。私たちが背中を向けて歩み出した時にも、主は近づいて来てくださって、立ち返らせてくださるのです。

「その神の愛を信じて、私は今日を生きて行こう」そういう人生を歩むことが、実は「聖なる生活をする事」に一番結び付いて行くのではないだろうかと思えます。さて、もう少し先まで行きましょう。

第28節、

このように、わたしたちは揺り動かされることのない御国を受けているのですから、感謝しよう。感謝の念をもって、恐れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えてゆこう。

すごく大事な言葉です。自分が満足ゆくように、自分が喜べるように、主に仕えてゆこうとは書いていないのです。恐れ慄き神を敬いながら、神に喜ばれるように今日を生き、すべてを献げてゆきましょう。仕えることは、お相手のためにすべてを献げてゆくことです。だから、あなたのすべてをその御方のために差し出してゆきましょう。そういう勧めが為されています。

キリスト者の理想的な生活とは、そのような生活だろうと思えます。この私を創られ、すべてを知っていらっしゃる御方が、もう欠けだらけの自分であり、誤りの多い自分であり、傲慢である自分であることを十分ご承知でありながら、「もうお前はそんなことにこだわらなくてもいいよ」と仰って、神の祝宴の席を用意して招いてくださっている。その御方を心の底から崇めながら、お慕い申し上げながら、かつ、恐れ慄きながら、その御方が喜んでくださることのために、今日の自分のすべてを用いて生きたいと願って歩いてゆくこと、それが大事なのです。

この世との比較、この世との軽重比ではないのです、神の国にあなたが立つために今を生きているのです。そういう呼びかけがこの手紙の最後の部分に書かれているわけです。この後、ものすごい迫害が起こります。「その迫害に耐えてゆくために、本当にあなたが神に喜ばれるように生き抜いてゆけなかったら、とてもその迫害に耐えてゆけませんよ」これはすごい大事な言葉であるように思えます。

第29節、

実に、わたしたちの神は、焼き尽くす火です。

すべてを焼き尽くす燃え盛る火です。しかし神を信じて生きる者はあのシャデラク、メシャク、アベデネゴのようにその火の中を生き抜き、歩み続け、多くの人に神が生きていることを証しできるのです。

そういう旧約の様々な出来事を集約しながら、著者は「あなたがたの希望はどこにあるのか、あなたがたの本当の喜びはどこにあるのか」と彼らに問いかけているのではないかと思います。

「キリスト者にふさわしい生活」それは正に「神に喜ばれるように生きること」と、このヘブライ人への手紙は言っています。それは「聖なる生活をする事」です。

第27回の表題「すべての人との平和、聖なる生活の追求」という生き方をすること、世の中がどう思うかと考えないで生きること、神がどうお思いになるかだけを考えて生きてゆくことです。これはすごく大きな課題だと思います。大切な問題であると同時に大変な問題なのです。

そのことを成し遂げて行く時に、神の国にある喜びを今、生きられるのです。どんな時にも感謝をもって主の御名をほめ讃えられるのです。そういう素晴らしい生活に一人一人が立たせて頂いて、主の名をほめ讃える喜びの中を歩ませていただけるのではないかと思います。

神が与えてくださった大きな恵みが無駄にすることのない生き方を共に進められますように。特にこの5月最後の主日がペンテコステ記念日であるわけですから、神の御霊を十分に与えられて、御霊によって歩ましめて頂けるように、共に祈りながら歩んでゆきたいと思

います。(1998年5月9日)

讃美歌21-271番 「喜びはむねに」

- | | |
|--|--|
| 1、喜びはむねに 満ちあふれる、
あまりに大きい この恵みよ。
神のひとり子が この世に生まれて
わたしの兄弟と なられたから。 | 3、主イエスを離れて ただひとりで
どうしてわたしは 生きられるか？
はかりも知られぬ 深い罪さえも、
主イエスの恵みは おおい包む。 |
| 2、悲しみうれいに 沈むときも、
ささえてくださる 神の恵み。
み子なる主イエスは 神のみもとから
愛のまなざしで みまもられる。 | 4、喜びはむねに 満ちあふれる、
すべての人々 主をあがめよ。
栄えの座を捨て 神のひとり子は
馬槽のなかに 身を置かれた。 |

写者あとがき

1、この聖書の箇所は「キリスト者にふさわしい生活の勧告」と小見出しがついていますが、私には全く理解できる文章ではありませんでした。まず、そのことで落ち込みました。

この著者と私の間に少なくとも三の隔りがあることも聖書を読む時に注意しなければならないと実感しています。しかし、その学びも何年もかかります。

①時間的な隔りがあること。それ故に歴史的背景を知っておかねばならない。

②文化的隔りがあること。風俗習慣言語の理解が必要である。

③地理的隔りがある。気候風土地形を学んでおかねばならない。

要は一人では無理です。

高等学校時代に初めて聖書を手にして創世記を読み始めた記憶があります。字面は読めず。何か面白くてどんどん読んでいけました。出エジプト記の35章位から眠たくなり、レビ記は読む気もしませんでした。そこで新約聖書に目を転じるとマタイによる福音書で系図が出てきます。自分で系図を作ろうとしましたが、受験勉強でそれは完成することができませんでした。読むことよりも聞くことが大事である。絵画を見ても説明を聞かなければ何もわからない。御言葉を聞くことが信仰の種になると今やっと分かった次第です。

2、時間的な隔りはありますが、状況は今も当時も変わっていないことを認識しつつ著者は神を信じて生きることがこの時代の中では受入れられない状況が起こりつつある、そういう信仰的危機の状況下で「あなたがたは人との平和を求めなさい」

「平和」という言葉が使えないような状況下で、尚も「あなたがたは平和に過ぎなさい」。迫害が酷く、混乱が起こり、世の中が乱れ、さまざまな不安が立ち込めるその中で、そうなればなるほど、「より一所懸命に神との関わりを確立してゆきなさい、それが恨みに生きるのではなく、救いのために、赦しのために、愛のために生きることに繋がるからです、それが、平和なのです」、「あなたが神と結びつくことのみによって与えられる祝福を彼らにも与え続けてゆく、そういう生き方」が勧告されていると松山幸生先生は説明をされています。更に「クリスチャンの究極の目的は、主と共に生きること、主の御招き（永遠の命）にあずかること、主の御恵みの宴に列席させて頂くこと」と説き明かしてくださっています。

3、2023年10月という時点でも世界はウクライナ戦争に続いてハマスとイスラエルの壮絶な戦いがあり、温暖化による気候変化による災害が世界の各地で起きています。日本では統一教会と政治家の結びつき、偶像崇拜に汚染された多くの民衆の苦しみ、苦味を潰すような毎日の報道の中で「より一所懸命に神との関わりを確立してゆきなさい」とのメッセージを真剣に聞き取らなければなりません。

平安を奪われ、喜びを奪われ、希望を奪われた人々に、平安を、喜びを、希望を回復させるためには、「私に何ができるだろうか」と考えて生きることが、実は、皆と違った生き方である『聖なる生活』なのです。イエスに近づくことは「他の人より良くやった」では

なく、「自分のやっていることは些細なことだが、このことによってあの人が救われ、この人が救われるのなら、主に深く感謝しよう」という生き方が求められています。と。

⑮節以下の難しい文章の解釈を非常に分かりやすく、現代的に説き明かして下さっている松山幸生先生の深い洞察力に再び脱帽する次第です。

4、「苦い根」とは「神の恵みを恵みとして受け止められない高ぶり、自分の益のためだけに何かしようとする思い、神に従うのはつまらないと感じる心」である。ウーンと唸り腹に落ちます。

「人は一挙手一投足、周りに影響を与えて生きている」ことを
「自分の行っている一挙手一投足が、ひいては、この世の人の救いと結びついている、すごい大きな責任を担わしめられています。だから、私たちが迷うと、世の中の人でも迷うのです。私たちがつまずくと、世の中の人でもつまずくのです。」「私の行動は、多くの人々のために方向性を与えるのです。」と力強く述べられています。

5、⑯⑰節

「神が終わりの時を与えていらっしゃることに対する日々の認識」がすごく欠落している。神がこの先にくださる恵みよりも、今、私が満足を感じることの方が大切だと考える生き方、これは私たちの中にはよくあります。「終わりの日の裁きなどは、あれは単に言い伝え、脅しであって、今、満足していなかったら何にもならないのだ。それでよいのだ」と考えるのはエサウの結末であり、「今、やりたい放題やっていて、後になって、救ってくださいというのはだめなのだ。との警告があります。

この頃の人「今、ここ」という言葉をよく用いていますが、ルターの言った意味はまったく理解されていません。自律性ともよく言われますが、己が源という発想が強く、偶像崇拝になりがちです。「主にある高貴な満足感は終わりの時を見つめた希望の中にある」と説かれています。まさに私自身へのメッセージです。

6、⑱節から㉔節も難解でした。

松山先生の「シナイ山とシオンの丘」との対比の説明で著者の難解なユーモアがやっと腑に落ちました。

「旧約にはなかった新しい神の契約により、神が終わりの日のために与えてくださった、私たちへの憐れみとしての『救い』がこの世に臨んだこと。即ち、御子キリストが贖いとなってくださったということ」です。

「神がこの私をかけがえのないものとして愛してくださる。この信仰が私たちの中に確立していれば、終わりの日に備えて下さっている大きな喜びのために、今を真剣に生きられるのではないかと思います。何が起こっても、（主が共にいてくださる）もう天国での席が予約されているのだ、既にあそこで宴が用意されているのだと確信できれば、今、

多少混乱があろうと困難があろうと、それを乗り越えゆく力が十分に与えられていくのではないかと思います。」

7、「キリスト者にふさわしい生活」とは「神に喜ばれるように生きること」「神がどうお思いになるかだけを考えて生きてゆくことです。これはすごく大きな課題だと思いますが、そのことを成し遂げて行く時に、神の国にある喜びを今、生きられるのです。どんな時にも感謝をもって主の御名をほめ讃えられるのです。と締め括ってくださいました。

今までで一番時間が必要な第27回でした。自戒と悔恨を持って乗り越えます。今回も森容子先生には多大のお時間を頂戴いたしました。著者の難しい書簡を紐解いてくださった松山幸生先生の解き明かしも理解できないところを丁寧に繰り返し説明をして頂きました。讃美歌の選定も有難うございます。感謝でございます。

2023年10月16日